

# 最後の10マルク

——トマス・ウルフ「汝らに告ぐることあり」——

The Last Ten Marks

岡 本 正 明

## 要 旨

トマス・ウルフのユダヤ人観については様々に論じられてきたが、総じて以下のような変革が見出される。『天使よ故郷を見よ』、『時と河について』、『蜘蛛の巣と岩』の3作品では、ユダヤ人観は「個人的な好悪の感情」にとどまっているが、最後の長編『汝ふたたび故郷に帰れず』において、それは「社会的な意識」にまで高められているということである。本論文は、ユダヤ人観の変革の契機となった出来事、それを素材とした短編「汝らに告ぐることあり」に焦点を当てようとするものである。この短編の原体験となった出来事とは彼のドイツ旅行であり、本論では、彼のナチス・ドイツに関する見聞（特にユダヤ人逮捕の目撃）について記述した。続く章では、この短編の内容を詳細にたどり、彼の体験が作品中でどのように主題化され、ドラマ化されているかを分析した。そしてこの作品において、ユダヤ人が残した「10マルク」が、いかに核心部分となっているかを論じた。

## キーワード

トマス・ウルフ

## 1 トマス・ウルフのユダヤ人観

トマス・ウルフにおけるユダヤ人の問題にかんしては、これまで学者・批評家らが、様々な観点から論じてきた。ウルフの伝記の決定版を書いたデヴィッド・ハーバート・ドナルドは、「ウルフは事実、反ユダヤ的で

あった』<sup>1)</sup>と断言している。一方、フリッツ・ハインリッヒ・ライセルは、ウルフが作品（とくに『蜘蛛の巣と岩』と『汝ふたび故郷に帰れず』）のなかで、ユダヤ人（あるいはユダヤ人の文化）に対して、愛情を示し、支持を表明していると述べ、ドナルドとは正反対の立場をとっている<sup>2)</sup>。このような両極的な立場のあいだで、中立的な立場をとっているのが、レオ・ガーコとパスカル・リーヴズである。両者は、トマス・ウルフのユダヤ人に対する感情・姿勢は「アンビバレント」なものであり、愛と憎悪が交互に立ちあらわれると結論している<sup>3)</sup>。

ウルフは、『天使よ故郷を見よ』の中で、ユダヤ人の子どもに対するいじめを描いた場面においてユダヤ人に対する軽蔑、嘲りをあらわにしているが、ここには、確かに「反-ユダヤ的傾向」がみられる。

But they guarded what they had against the barbarians. Eugene, Max, and Harry ruled their little neighborhood : they made war upon the negroes and the Jews, who amused them, and upon the Pigtail Alley people, whom they hated and despised.

*(Look Homeward, Angel)*<sup>4)</sup>

They spat joyously upon the Jews.

*(Look Homeward, Angel)*<sup>5)</sup>

また、ウルフは『時と河について』において、ユダヤ人をステレオタイプ化し、嫌悪感を示している。

... And there were the faces, cruel, arrogant and knowing of the beak-nosed Jews, the brutal heavy figures of the Irish cops, and their red beefy faces, ...

*(Of Time and the River)*<sup>6)</sup>

ここでは、「ステレオタイプ化」と「反-ユダヤ的傾向」は密接にかかわっている。ジョン・アッペルによると、とくに19世紀から20世紀初頭のアメリカでは、雑誌等で、「ユダヤ人の鼻」についてのカリカチュアを描き、「反-ユダヤ的傾向」をあらわにしているという。アッペルの論考で取り上げられている以下の挿絵は、その一例である<sup>7)</sup>。



Mister Cohn.

HEREDITARY TYPES.

Master Cohn.

Mrs. Cohn, née O'Rourke.

図1

一方で、主人公ユージーンが大学の教え子エイブ・ジョーンズと親しくなると、ユダヤ人に対する愛と共感が示されている。

Eugene began to like Abe very much. He left him and went up to his room with a feeling of such relief, ease and happiness as he had not known for months ;  
*(Of Time and the River)*<sup>8)</sup>

ここには、明らかにユダヤ人に対する「アンビバレントな姿勢」が見出さ

れる。

『蜘蛛の巣と岩』では、主人公ジョージとユダヤ人の血を引いている恋人エステルとの関係がうまくいっている間、彼は、エステルのユダヤ人の祖先、友人に親近感を抱いている。

... One of the finest elements in the Jewish character is its sensuous love of richness and abundance. *(The Web and the Rock)*<sup>9)</sup>

二人が破局を迎えるようになると、ジョージの「反-ユダヤ的傾向」は強まり、彼はユダヤ人（とくにユダヤ人女性）に対する反感、嫌悪をあらわにする。

They were the living rack on which the trembling backs of all their Christian lovers had been broken, the living cross on which the flesh and marrow of Christian men had been crucified. . . .

And behind them always in the splendour of the night were the dark faces of great, beak-nosed Jews, filled with insolence and scorn, . . .

*(The Web and the Rock)*<sup>10)</sup>

しかしながら、『汝ふたたび故郷に帰れず』において、ウルフのユダヤ人観に大きな変革が起こる。それは、いかなる変革であろうか。それまで、ウルフのユダヤ人観は、総じて言うならば、ユダヤ人に対する個人的な好悪の感情であった。ところが、『汝ふたたび故郷に帰れず』において示されるユダヤ人観は、単なる個人的な感情のレベルにとどまるものではなく、社会的な意識のレベルにまで高まっている。この作品の第6部「汝らに告ぐることあり」において、あるユダヤ人の逮捕をきっかけとして、

ウルフの分身である主人公ジョージ・ウェバーは、ユダヤ人を迫害するナチズム、あるいは、人道的に許しがたい悪の存在にたいして、強く意識するようになるのである。

\*

本論文は、このようなウルフのユダヤ人観の変革の契機となった出来事、そして、それに触発されて成立した一つの短編小説について焦点を当てようとするものである。出来事とは、ウルフのドイツ旅行——とくに、その際に目撃したユダヤ人の逮捕——であり、また、短編小説とは、『汝ふたたび故郷に帰れず』の第6部の題と同名の「汝らに告ぐことあり」(“I Have a Thing to Tell You”)である。

この短編小説は、1937年3月、『ニュー・リパブリック』誌に3回に分けて掲載されたものである。そして、この短編を加筆・修正して出来上がったのが、長編『汝ふたたび故郷に帰れず』の第6部である。これはいわば、ウルフのユダヤ人に対する意識の変革のきっかけとなった(きっかけを描き出した)短編小説である。

ウルフは、この短編のタイトルとして、もともと二通りの案を考えていた。一つは、“I Have a Thing to Tell You”であり、もう一つは、“I Have Them Yet”である。そのことは、早くも、1936年9月末のウルフの「ノート・ブック」に明確に記されている。

I Have a Thing to Tell You

or

I Have Them Yet<sup>11)</sup>

タイトル案の一つである、“I Have Them Yet”「わたしはまだそれらを持っている」における‘Them’「それら」とは、何を指しているのか。そ

れは、ウルフの意識改革にとって極めて重要なものであり、本論文の表題とかかわっていることを、あらかじめ申し上げておきたい。‘Them’「それら」とは、何なのか。もう一つの原題にあるこの言葉が、極めて重要なものであることが、この小論では、しだいに明らかになってゆくはずである。

## 2 ウルフの最後のドイツ旅行

1936年7月23日、ウルフは、7度目のヨーロッパへの旅に出発する。彼は、この旅行で、主としてイギリス、ドイツ、フランスに滞在した。ドイツでは、おもにベルリンに滞在している。

1936年のドイツ、それはいかなる時期であっただろうか。H. マウ・H. クラウスニック著、内山敏訳『ナチスの時代』（岩波新書）の巻末に付された簡潔な年表（この年表は原著にはないもので訳者が付したものである）を参考にしつつ、確認してみよう<sup>12)</sup>。

表1

	ドイツ	世界
1935	1. 15 ザールのドイツ復帰	5. 2 仏ソ相互援助条約調印
	3. 16 独、ヴェルサイユ条約の軍事条項廃棄、一般兵役義務開始	5. 16 ソ連、チェコと相互援助条約調印
	4. 11 ストレザ会議、英仏伊3国の対独共同戦線	7. 25～8. 20 コミンテルン第七回大会、人民戦線戦術採用
	6. 18 英独海軍協定成立	10. 2 伊エチオピア戦争開始
1936	3. 7 独軍ラインラント進駐	2. 17 スペイン、人民戦線派総選挙で勝つ
	6. 17 全警察力の国家警察への統合	2. 26 東京で二・二六事件
	7. 11 独喚同盟条約締結	2. 27 仏ソ相互援助条約批准
	9. 9 独、第二次4か年計画発表	5. 9 伊エチオピア征服

1936年3月7日、ドイツ軍はラインラントに進駐し、ヴェルサイユ条約は事実上無効となる。また、表2の示す通り、1936年には、前年に比べて軍事費が倍増している<sup>13)</sup>。

表2 ドイツ国の1933年から1938年における軍備支出

項目	1933	1934	1935	1936	1937	1938	1933から 1938まで
軍備支出 (10億マルク)	0.7	4.2	5.5	10.3	11.0	17.2	48.9
うち、メフォ手形により資金 調達された部分の比率 (%)	—	50	49	44	25	—	25
軍備支出の 対ライヒ財政支出比 (%)	8.3	39.3	39.6	59.2	56.7	61.0	49.9
対国民総生産比 (%)	1.2	5.0	7.1	11.2	12.0	15.7	9.5
対国民所得比 (%)	1.6	6.5	9.2	14.3	15.1	19.7	12.2

この時期、景気は奇跡的な回復を達成し、年成長率は約10%になった<sup>14)</sup>。失業率も激減し、翌年には、ほぼ完全雇用が達成される<sup>15)</sup>。

1936年5月9日には、イタリアがエチオピアを征服し、ムッソリーニのファシズム政権の力が強まると、ドイツとイタリアはさらに同盟関係を深めてゆき、対外的にヒトラーの独裁的権力の基盤が拡大してゆく。6月4日、スペイン内乱がはじまると、ヒトラーは独裁的なフランコ政権を承認し、さらに対外的に権力基盤をひろげてゆく。

6月7日には、ヒトラーは全警察力を国家警察に統合し、権力の「一元化」をますます強めてゆく。また、『ナチスの時代』に書かれているように、この時期、警察組織ばかりでなく、青年組織「ヒトラー・ユーゲント」、<sup>16)</sup>「ナチ婦人連盟」、<sup>17)</sup>「ナチ福祉連盟」、<sup>18)</sup>「国家文化局」など、「生活のあらゆる領域が巨大な組織によって『つかまれ』、指導部の意図によって

『一元化』された。」<sup>16)</sup>

ユダヤ人迫害に関しては、すでに1935年9月の「ニュルンベルク法」によって、ドイツ人とユダヤ人の結婚が禁止されていた。「これによってユダヤ人はドイツの市民権を否定され、国旗を掲げることも禁止されている。」(リチャード・ベッセル編『ナチ統治下の民衆』<sup>17)</sup> 1936年には、ますますユダヤ人の排除は強化され、とりわけ、ユダヤ人の伝統的儀式が禁止され、店の前にユダヤ人とわかる姓名を大きく表示することを義務づける政令が発せられている(大野英二『ナチズムと「ユダヤ人問題」』<sup>18)</sup>)。

こうした経済的復興、権力の強大化・一元化・対外的拡大のなか、ドイツにおいてヒトラー崇拜は一段と高まりつつあった。

そして、ドイツにおける1936年の最大の出来事といえば、言うまでもなく「ベルリン・オリンピック」である。「ベルリン・オリンピック」を通じて、ヒトラーは、国内的にも、対外的にも、その一元化した権力を誇示し、さらにヒトラー崇拜をあおりたてようとしたのである。

ウルフがベルリンにやってきたのは、まさに、そのオリンピックが開催されていた1936年8月のことであった。

ウルフは、すでに作品(『天使よ故郷を見よ』と『時と河について』)が独訳され、好評を得ていたこともあり、ドイツでは大歓迎され、インタビューを受けた。オリンピックの開催中、ナチの幹部たちは、自らの権力を誇示しようと競って華やかなパーティーを開いたが、ウルフもそのいくつかに出席した。また、ウルフはオリンピックスタジアムで、アメリカ大使のボックス席から観戦することを許された。彼は、ボックス席からヒトラーを間近に見ることができた。その時のエピソードに関して、デヴィッド・クレイ・ラージは、『ベルリン・オリンピック1936』(高儀進訳)のなかで次のように述べている。



愛国心を呼び覚まされた彼は、自国のアメリカ選手に対して大声で応援し、黒人に対して偏見を持っていたにもかかわらず、ジェシー・オーエンスを声援した。「オーエンスはタールのように黒いが」と彼は言った、「それがなんだと言うのだ。われらが選手なのだ。彼は素晴らしい。私は彼が誇らしかったので、声を限りに声援した。」ウルフは貴賓席に近いドッド大使のボックス席に坐っていたが、オーエンスに対する声援があまりにも喧しかったので、ヒトラーは腹を立て、一体誰が騒いでいるのだらうと辺りを見渡した<sup>19)</sup>。

このエピソードに関して、ウルフの伝記作者デヴィッド・ハーバート・ドナルドは、ヒトラーが不愉快な顔をしたのはおそらく、彼が黒人を人種的に劣ったものとみなしていたことが理由であろうと推測している<sup>20)</sup>。

ウルフは、スタジアムの外でも、ヒトラーを目撃している。それは、オリンピックを観戦するためにオープンカーに乗って移動して行くヒトラーの姿である。ウルフはのちに、その時見た光景を、『汝ふたたび故郷に帰れず』のなかで、事実在即して克明に描き出している。『ヒトラーへの聖火』の著者ダフ・ハート・デイヴィスは、ウルフのその文章を引用しつつ、オープンカーで移動する独裁者の姿を次のように描き出している。

午後三時総統の出発——当日のプログラムには肉太の文字でそう印刷されている。三時の鐘が鳴ると、黒いメルセデス・ベンツのオープンカーの列が総統官邸をでて、ヴァイルヘルムシュトラーセを走り、ウンター・デン・リンデンにはいった。軍服姿のヒトラーは左手をフロント・グラスにおき、ひっきりなしの敬礼に返礼するため右手を空けて、運転席の隣に立っていた。つい今しがた雨が襲ったばかりだが、重い車両がブランデンブルク門を曲がる時も、濡れた路面に滑るタ

イヤの音は、道路の両側から湧きあがる歓声に埋もれて聞こえなかった。ジョージ・ウェバーという小説の登場人物の目を通してトマス・ウルフは、通過するヒトラーをあざやかに描きだしている。

「ようやく彼がきた——草原に吹く風に似たものが群衆のあいだをわたり、はるか遠くから彼といっしょに潮が押しよせた。そこに祖国の声と希望と祈りがあった。指導者は輝く車に乗ってゆっくりと現れた。コミック・オペラ風の口髭を生やした小柄で、黒っぽい髪の男が、不動の姿勢でにこりともせず立ち、手のひらをむけて片手をあげていた。ナチスの敬礼ではなく、ブツダかメサイアが恵みを垂れるしぐさのようにあげていた。」(岸本完司訳)<sup>21)</sup>

ウルフがこのようなヒトラーの姿を描いている章のタイトルは、'Dark Messiah'「暗黒の(腹黒い、凶悪の、暗愚な、陰険な)救世主」となっている。この章の中で、主人公ジョージは、この救世主まがいの「暗黒のメシア」に不吉なイメージを感じとっている。そしてそこに、忍び寄る戦争の予兆を感じとり、独裁者をかくまで崇拜している民衆の愚かしさとヒステリックなまでの熱狂ぶりに恐怖をおぼえている。

ウルフは、ベルリン・オリンピックを観戦した後、チロール地方を旅行し(そのあいだ、短い期間ではあるが、ある女性と恋に落ちている)、9月8日にベルリンを立ち、フランスへと向かう。そして、その列車の旅の途中、ある衝撃的な事件に出くわす。同じコンパートメントにいたある男(名前は不明であるが、ユダヤ人であることが判明する)が、ドイツとベルギーの国境でナチの警察に逮捕されるという事件である。このユダヤ人は、ベルリンからアーヘンまでの切符しか持っていなかったため、アーヘンにてさらにパリ行きの切符を購入しようとした。その時、かねてから男に疑いの目を向けていた警察の訊問にあい、実は国外逃亡を企てていたことが発覚してし

まうのである。しかも、この男が携えていたバッグには大量のドイツマルクが入っていたため、警察の追及は激しさを増し、結局彼は逮捕され、連行されてしまうのだ。

この事件を目撃したウルフは、言いようのない恐怖と怒りと悲しみをおぼえ、これをきっかけに、ユダヤ人を迫害するナチスに対する批判をつよめてゆく。そしてパリに着くやいなや、この事件を、ほぼ事実にして作品化しようと決心し、一気呵成に草稿を書き上げる。ウルフは、1936年9月16日のエリザベス・ノーウェルあての手紙で、次のように記している。

I've written a good piece over here—I'm afraid it may mean that I can't come back to the place where I am liked best and have the most friends, but I've decided to publish it. So wait on me.<sup>22)</sup>

これは、ナチス批判の小説であり、ナチスの悪・非道を告発する小説であった。ここでは、ウルフは、ユダヤ人に対する個人的感情をこえて、人道的、社会的な立場から、ユダヤ人迫害を行うナチスの悪を批判し、告発しているのであり、ウルフのユダヤ人に対する姿勢は、社会意識にまで発展しているのである。

ウルフは、パリで書き始めたこの作品の草稿に手を入れ、前述の通り、1937年3月、『ニュー・リパブリック』に“I Have a Thing to Tell You”という題の短編として発表することになる。この短編のタイトルには、“Nun Will Ich Ihnen Was Sagen”というドイツ語の題も併記されている。直訳すれば、「今や（目下のところ）汝らに言いたいことがある」という意味であるが、これは「今まさに起きている事柄（に関するメッセージ）を読者に語り伝えたい」というウルフの意図をより明確に表している題であろう。

さて、このようにして成立した短編小説「汝らに告ぐることあり」は、具体的にはいかなる作品なのであろうか。それが、以下の論考で考察すべきことである。

### 3 最後の長編に向けて

「汝らに告ぐることあり」は、3部構成となっている。

第1章は、主として、語り手である「私」（ポール）とその友人の対話から成り立っている。そこでは、友人との対話をつうじて、ドイツにおける全体主義、ヒトラーに対する絶対的崇拜が、暗示的に描かれている。第2章では、ベルリンからパリへと向かう列車の中の人間模様が描かれており、それは、「私」と車中の人々との間に生じる暖かい心の交流、絆の物語である。そして、第3章は、同じコンパートメントにいたユダヤ人が逮捕されるという事件をあつかっている。

これら3つの章は、「暗」—「明」—「暗」とコントラストをなしており、変化に富みドラマティックである。また、第1章の「暗」の部分で予示されているユダヤ人迫害のテーマが、第3章で現実化し、顕在化するという構造をとっており、第1章と第3章は緊密な関係を持ち、相互に響き合っている。しかも、第3章の悲劇性が、第2章の「明」とのコントラストによって、いっそう強調されるという構造をとっており、第2章の心あたたまる明るいシーンは、ドラマの構成上、有効に機能していると言ってよい。このような劇的な構成により、時代の暗いイメージが強調され、人間の愛や希望や夢を暴力的に蹂躪してくるナチズムの悪に対するウルフの批判は先鋭化する。また、「ペリペティア」のように、ユダヤ人逮捕という衝撃的な事件が、意表を突く形で物語の流れを垂直的に切断してしまうという構造自体が、ナチズムの有無を言わさぬ容赦のない暴力の介入を読者に印象づけるのである。

さて、物語のあらすじを、以下にもう少しくわしく述べてみよう。

第1章では、ベルリンを旅立つ直前、「私」(ポール)は友人のフランツと会話を交わす。フランツは「私」に、現在のドイツにおける、ヒトラーを盲目的に崇拝するナチスの人間たちの愚かさ、非道性を批判し、ユダヤ人であるという理由で職業を奪い取る、恐るべき迫害の実態について語る。また、ユダヤ人差別のなかで自らが陥っている苦境について語る。それは、1820年にさかのぼって、ユダヤ人の血が混じっていないという「アーリア人としての純血性」を証明できないと、己の職業から追放される、ということである。フランツは、自分がドイツ人であることを知っているが、母親と父親が正式な婚姻関係を結んでいないため、出自を証明するものがない。彼は、父親と頻繁に会っており、その父なら出自を証明できるのだが、決して父に証明してもらおうとしない。それはなぜだろうか。

それは、皮肉なことだが、父がナチスの幹部であるからである。確かに父に頼めば、彼はナチスの迫害から逃れることもできるだろう。しかしフランツは、断固として拒絶する。その理由として、第一に、彼自身が言うように、父との現在の関係は純粹に私的なもので、親和的で友情あふれるものであり、父を利用したくない(父に政治的に関与してほしくはない)という父に対する個人的な心情がある。さらには、フランツは反-ナチズムの立場を闡明にしており、ナチスの悪と断固として戦い、それを告発しようと決心している。そうした自分が、ナチスの迫害から身を守るためにナチスの中枢にいる人間に頼ることは、思想的な矛盾であり、自分にとって倫理的、道義的に許しがたいことなのである。

このようなアイロニカルな状況によって、第1章の暗いイメージは増幅し、悲劇性はいっそう増すのである。「私」も、この「出口なし」の状況に絶句するばかりであった。そして、フランツの次のような切なる願いを受け止めることが唯一できることであった。それは、こうしたナチズムの

実態、状況を、作家である「私」が小説化し、広く世に広めてほしいという願いである。この願いをしっかりと受け止めつつ、「私」は、列車の出発の時刻がくると、ひとりベルリンを旅立つ。

第2章は、ベルリンからベルギーとの国境の町アーヘンに着くまでの、列車内部での物語である。

「私」とおなじコンパートメントには、以下のような人物が座っていた。対角線上の向かいの席には、ポーランド出身で、アメリカに在住している青年。彼は、ポーランドの家族を訪ねて、アメリカに帰る途中であった。真向かいの席には、落ち着きのない感じの謎の男。隣の席には、ドイツ人の男女。「私」はもっぱら、英語を話すことができるポーランドの青年とのみ話した。しだいに「私」とポーランド青年の話が熱を帯びてくると、それに刺激されてか、他の3人もドイツ語で親密に話を交わすようになる。

話をするうちにとても親しくなった「私」と青年は、コンパートメントを出てゆき食堂車に行き、そこで他の3人についていろいろと推測を巡らす。そして、3人についていろいろと想像しているうちに、いつの間にか3人を身近に感じ親しみを覚えるようになってくる。食堂車からコンパートメントに戻ってみると、そこでも状況は変化していた。他の3人も、「私」と青年について推測を巡らし、親しく話し合っているうちに、いつの間にか「私」と青年にたいし親しみがわき、よく知っているかのように思いこむようになる。

The lady smiled at us as we came in. And our three fellow passengers all regarded us with a kind of sharpened curiosity. It was evident that during our absence we had been the subject of their speculation. ("I Have a Thing to Tell You")<sup>23)</sup>

5人がふたたび一緒になると、このように想像を介して関心や親近感が芽生えたことで、皆は親密に語り合うようになる。相手に対して抱いた推測を確かめるかのように、片言の英語やドイツ語を交えて話しかける。そうするうちに、皆はすっかり打ち解け、お互いの身分や状況について胸襟を開いて語る。それによると、隣に座っている男女はマネキン業に従事しているようで、女性は経営者であり、男はデザイン担当者である。最新のモードを知るためにパリに向かう途中だという。真向かいの男は、弁護士であるといい、これからパリの会議に参加する予定だという。「私」は、列車に乗った当初、この男の秘密めいた態度と疑り深い様子に不快感を覚えていたが、いざ打ち解けて話してみると、とても親近感を覚えるようになっていた。こうして、いつのまにか5人は短時間のうちに何年もの間知己であったかのように親密になった。

In the most extraordinary way, and in the space of fifteen minutes' time, we seemed to have entered into the lives of all these people and they in ours. ("I Have a Thing to Tell You")<sup>24)</sup>

このように親しい間柄になったため、ポーランド人の青年は他の3人（マネキン業の男女と弁護士と称する男）のために、何か親切なことをしてあげたくなった。そこで、次のような妙案を思いついた。

当時、ドイツ人が外国に持ち出せる貨幣は10マルクまでと定められていた。ポーランドの青年は、23マルクまで持ち出せるという旨の許可証をあらかじめ携えていた。許可証を持っていないアメリカ人の「私」（ポール）は、10マルクまでしか持ち出すことができなかった。「私」と青年は、食堂車において、携えていたマルク（「私」は10マルク、青年は23マルク）をすべて使い果たしてしまっていたので、現在はともに0マルクである。青年

は以下のようなことを提案した。彼が女性から23マルク、「私」が弁護士と称する男から10マルクをあずかり、国境を越えた時点でそれらを返してあげれば、ドイツ人が国外に持ち出せるマルクの額が増えるという案である。確認のため図示すれば、以下の通りである。

マネキン業の女性 →23マルク→ポーランド人の青年 (0 +23マルク)  
弁護士と称する男性→10マルク→「私」 (0 +10マルク)

マネキン業の女性と弁護士と称する男は、この提案にすぐに同意した。そしてこれをきっかけに、ますます5人の仲は打ち解け、親しみと絆が増していった。

これが、第2章のあらすじである。

ところが、第3章では状況が一変する。

列車が、ドイツとベルギーの国境の町アーヘンに到着すると、「私」たちは停車時間のあいだ気分転換のためにホームに出た。そして、ふたたび車内に戻ろうとしたとき、事件は起こった。

「私」たちのコンパートメントのブラインドはすべて下ろされ、「私」たちは車内に戻ることを制止された。何が起きたのか。聞くところによると、同じコンパートメントにいた弁護士と名乗る男が、かねてからユダヤ人であるこの男を疑っていたナチの警察に逮捕されたとのことだ。彼は、アーヘンからパリ行きの切符を購入しようとしたところ、旅の目的、予定をこと細かく訊問された。とくに、パリに1週間滞在するのに10マルクでどうやっていくのかと聞かれたとき、彼はひどく動揺してしまい、うっかり、ポケットにさらに20マルク持っていることを忘れていた、としゃべってしまう。それで、10マルク以上持っていたことを偽っていたゆえに彼は疑われ、バッグの中まで調べられてしまう。すると、バッグの中からは大



量のマルク札が発見されたのである。

「私」がコンパートメントの前まで行くと、そこに逮捕されたユダヤ人の男が座っていた。男は、恐怖に満ちたまなざしで、何かを訴えかけるように「私」の方を見た。警察はその後、容赦なく男を連行していった。

They had him. They surrounded him. He stood among them, protesting volubly, talking with his hands now, insisting all could be explained. And they said nothing. They had him. They just stood and watched him, each with the faint suggestion of that intolerable slow smile upon his face. They raised their eyes, unspeaking, looked at us as we rolled past, with the obscene communication of their glance and of their smile.

And he—he too paused once from his voluble and feverish discourse as we passed him. He lifted his eyes to us, his pasty face, and he was silent for a moment. And we looked at him for the last time, and he at us—this time, more direct and steadfastly. And in that glance there was all the silence of man's mortal anguish. And we were all somehow naked and ashamed, and somehow guilty.

("I Have a Thing to Tell You")<sup>25)</sup>

このハードボイルド的な非情なまでの文章は、ユダヤ人の悲劇とナチの非人間性を、読者に克明に印象づける<sup>26)</sup>。また、非人称的な、個人性のとぼしい描写が、個人の実存と存在意義も無視し消去するような、ナチの恐るべき冷酷さと非情を象徴的に示していると言えよう。

「私」は、男から10マルクを預かったままであった。しかしながら、それは永久に返すことができなくなり、「私」の手元に残された……。

以上が、この短編小説のあらすじである。

この短編を雑誌に掲載した直後、ナチス批判をしたという理由で、トマス・ウルフのすべての書物がドイツで発禁処分になったという。そのことは、すでに、先に引用したノーヴェルあての手紙の中でウルフが予感していたことである。ウルフは、作家としての犠牲を払っても、「読者に告ぐること」（目下のところ、読者に言いたいこと）があり、己の作家的良心に逆らうことができなかったのである。

\*

トマス・ウルフは、ユダヤ人の逮捕という衝撃的な事件をきっかけに、ナチス批判、そして、より普遍的には、社会悪全般に対する告発、批判の傾向をつよめてゆく。

ヨーロッパへの旅から帰国したあと、彼は、ノートや手紙のなかで、反ナチス、ひいては、反ファシズムの政治的な立場を明らかにしているが<sup>27)</sup>、それは作品の構想・執筆に大きく影響を与えることになる。彼が短編「汝らに告ぐることあり」を執筆したのち、新たな長編小説の構想もしだいに明らかになっていった。それは、のちに『汝ふたたび故郷に帰れず』に発展してゆく小説の構想（主として彼のノートブックに記されている）の随所に、この短編と同じタイトルが記されていることからわかる<sup>28)</sup>。また、『汝ふたたび故郷に帰れず』は、全篇が1930年代の暗いイメージを象徴的に描き出しており、社会の悪、不正、非道について批判する書である。そのなかでは、とくに、ヒトラーの記述とユダヤ人迫害の記述が中心的テーマを示していると言ってよい。この長編の方向性は、短編「汝らに告ぐることあり」と軌を一にするものである。つまり、ドイツでのユダヤ人逮捕という事件が、ウルフの社会意識を目覚めさせたばかりか、作品の統合原理、作家としての方法意識においても、大変革を引き起こしたと推測することができるのである。

## エピローグ 最後の10マルク

さて、最後になるが、あるエピソードを述べて、この小論を終えることにしよう。

ウルフが、「汝らに告ぐることあり」で記していた、ユダヤ人の男から預かった10マルクであるが、これは実話である。返せずに手元に残された10マルクの描写には、深い意味が込められている。ウルフは残された10マルクについて、短編小説「汝らに告ぐることあり」のなかでは、以下のよう

All of a sudden I felt sick, empty, nauseated. That money, those accursed ten marks, were beginning to burn a hole in my pocket. I put my hand into my best pocket and the coins felt greasy, as if they were covered with sweat.<sup>29)</sup>

I put the money back and in a moment said : "Ich fühle gerade als ob ich Blutgeld in meiner Tasche hätte". (p. 275)<sup>30)</sup>

また、長編小説『汝ふたたび故郷に帰れず』のなかの第6部「汝らに告ぐることあり」の中では、次のように描写（再度描いて）いる。

All of a sudden George felt sick, empty, nauseated. Turning half away, he thrust his hands into his pocket—and drew them out as though his fingers had been burned. The man's money—he still had it! Deliberately, now, he put his hand into his pocket again and felt the five two-mark pieces. The coins seemed greasy, as if they were cov-

ered with sweat.<sup>31)</sup>

George put the money away. Then he said :

“I feel exactly as if I had blood-money in my pocket.”<sup>32)</sup>

「10マルクが焼けてポケットに穴があく」。「ポケットから10マルクを取り出したとき、指が焼ける（やけどする）ようであった」。どちらの表現も激しい描写である。痛みと苦しみが伝わってくるようだ。

また、「汝らに告ぐることあり」では、ただ10マルクの硬貨と記されているが、『汝ふたたび故郷に帰れず』では、5枚の2マルク硬貨と、より具体的に書かれていることも言い添えておこう。

いったい、なぜこれほどまでに、残された10マルクが痛みと苦しみをともなうのであろうか。

第一に、上述したような、ナチの非人道的行為によるユダヤ人の悲劇を、残された10マルクが何度でも想起させるからであろう。しかも、「私」が預かった硬貨は、『汝ふたたび故郷に帰れず』で記されているように、おそらく5枚の2マルク硬貨であり、それは、ドイツで1936年にすでに流通していた、いわば「ナチスのコイン」である<sup>33)</sup>。表面には、ヒトラーが英雄視したヒンデンプルクの肖像が刻まれ、裏面には、鷲とハーケンクロイツが刻まれている、「2ライヒスマルク銀貨」（この図柄は1936年-1939年の間流通）である可能性が高い。もしそうであれば、こうした図柄のコインは、「私」にいつそうナチスの非道と暴力を意識させたことであろう（図2）<sup>34)</sup>。



図2

第二に（第一と関連するが）、汗にまみれたコインが、ユダヤ人の流した血（‘sweat’には、「血を汗のように流す」という意味合いがある）を連想させ、ユダヤ人の「死の苦しみ」を連想させるからであろう。

第三に、‘blood-money’ [犯人通報報奨金]（‘Blutgeld’ [死罪犯人の引き渡し賞金]）という言葉から推察されるように、この10マルクは、ユダヤ人が逮捕されるのをただ見ているだけで何もできなかった自らの恥ずかしさと罪悪感を想起させるものであるからであろう。このことは、先に引用したユダヤ人が連行されてゆく場面に記されていることであり、また、テレンス・デュースナップが、すでに指摘している点である<sup>35)</sup>。

そして、最後に、この10マルクは、これを持っていた一人の人間がこの世に存在していたことの証であり、同時に、そのかけがえのない存在が今は失われて（奪われて）しまったことを、痛切に想起させるものであるからであろう。ナチに逮捕されたこのユダヤ人は、おそらく収容所に送られ、すべてをナチに没収されるであろう（また、作品中で、「死の苦しみ」とか「死罪犯人引き渡し賞金」といった表現によって、このユダヤ人の死が暗示されている）。この10マルクは、ユダヤ人がこの世に最後に残したもの、この

ユダヤ人の生きていた証、つまり、象徴的な意味における「最後の10マルク」であったのだ。

\*

ウルフは、ユダヤ人の男性から預かった10マルクを、ドイツを去ってからも手放せずにしたという。パリでは、ポケットに入れたまま、短編「汝らに告ぐることあり」の草稿を執筆していた。また、アメリカに帰ってからも、この10マルクのことは彼の頭をはなれなかった。「汝らに告ぐることあり」を推敲し、完成させているときも、仕事机の上につねにこの10マルクを置いて、それをながめていたという。ウルフの二人の伝記作者が、このエピソードについて記している。エリザベス・ノーヴェルは、「ウルフは、この硬貨をながめては、哀れみのために口をすぼめ、心動かされて言葉を発することができず、何度も繰り返し首をふっていた」と述べている<sup>36)</sup>。また、デヴィッド・ハーバート・ドナルドは、「ウルフは、それらの硬貨を時々ながめては、口をすぼめ、悲しげに首をふっていた」と記している<sup>37)</sup>。

残された10マルクを見て、絶句し、哀れみと悲しみのため首をふるウルフは、どのようなことを思っていたのだろうか。我々はそれを、上述したように、作品中の人物の心理をとおして、ただ推測するしかない。しかし、それこそが、「汝らに告ぐることあり」のなかで、ウルフが読者に告げたかったことではないか。そう考えると、この短編のもう一つの原題が、「私はまだそれらを持っている」(I Have Them Yet)であったことの、深い理由がわかってくるような気がする。

#### 注

※本論文は、中央大学人文科学研究所・研究会（「ディアスポラ・ユダヤ研究」2012年11月24日）における発表に基づくものである。

- 1) David Herbert Donald, *Look Homeward : A Life of Thomas Wolfe* (Harvard Univ. Press, 1987), p. 356.
- 2) Fritz Heinrich Ryssel, *Thomas Wolfe* (Frederick Ungar Publishing Co., 1972), p. 84.
- 3) Leo Gurko, *Thomas Wolfe : Beyond the Romantic Ego* (Thomas Y. Crowell Company, 1975), pp. 6-7, p. 25, pp. 96-97, p. 118.  
Pascal Reeves, *Thomas Wolfe's Albatross : Race and Nationality in America* (University of Georgia Press, 1968), pp. 39-85.
- 4) Thomas Wolfe, *Look Homeward, Angel* (Scribners, 1929 [Scribner Classics edition, 1997]), p. 95.
- 5) *Ibid.*, p. 96.
- 6) Thomas Wolfe, *Of Time and the River* (Scribners, 1935 [Scribner Classics edition, 1999]), p. 424.
- 7) John J. Appel, "Jews in American Caricature 1820-1914" (Jeffrey S. Gurock ed. *American Jewish History : Volume 6* [Routledge, 1998]), p. 76.
- 8) *Of Time and the River*, p. 453.
- 9) Thomas Wolfe, *The Web and the Rock* (Penguin Books), p. 412.
- 10) *Ibid.*, p. 611.
- 11) Richard S. Kennedy and Pascal Reeves ed., *The Notebooks of Thomas Wolfe Vol. II* (The University of North Carolina Press, 1970), p. 835.
- 12) H. マウ, H. クラウスニック 『ナチスの時代』 (内山敏訳, 岩波新書, 1961年)。
- 13) カール・ハインリッヒ・ハンスマイヤー, ロルフ・ツェーザー 「戦争経済とインフレーション」 (ドイツ・ブンデスバンク編, 呉文二, 由良玄太郎監訳, 日本銀行金融史研究会訳 『ドイツの経済と通貨—1876-1975年』 上巻 [東洋経済新報社, 1984年] 所収), 477ページ。
- 14) 塚本健 『ナチス経済—成立の歴史と論理』 (東京大学出版会, 1964年), 251ページ。
- 15) カール・ハインリッヒ・ハンスマイヤー, ロルフ・ツェーザー 「戦争経済とインフレーション」, 462ページ。
- 16) H. マウ, H. クラウスニック 『ナチスの時代』 (岩波新書), 71ページ。
- 17) リチャード・ベッセル編 『ナチ統治下の民衆』 (柴田敬三訳, 刀水書房, 1990年), 122ページ。
- 18) 大野英二 『ナチズムと「ユダヤ人問題」』 (リプロボート, 1988年), 79ページ。

- 19) デヴィッド・クレイ・ラージ『ベルリン・オリンピック 1936—ナチの競技』（高儀進訳, 白水社, 2008年）331ページ。
- 20) David Herbert Donald, *Look Homeward*, p. 386.
- 21) ダフ・ハート・デイヴィス『ヒトラーへの聖火—ベルリン・オリンピック』（岸本完司訳, 東京書籍, 1988年）, 154ページ。
- 22) Elizabeth Nowell ed., *The Letters of Thomas Wolfe* (Scribners, 1956), p. 541.
- 23) C. Hugh Holman ed., *The Short Novels of Thomas Wolfe* (Scribners, 1961), p. 260.
- 24) *Ibid.*, p. 263.
- 25) *Ibid.*, p. 274.
- 26) 田辺宗一は、ウルフの文体とヘミングウェイの文体の類似性について既に指摘している（大沢衛編『トマス・ウルフ』[20世紀英米文学案内 6, 研究社, 1966年], p. 170）。
- 27) *The Notebooks of Thomas Wolfe Vol. II*, pp. 915-916.  
*The Letters of Thomas Wolfe*, pp. 735-736 (To the Editor of *The Nation*, March 20 (?), 1938).
- 28) *The Notebooks of Thomas Wolfe Vol. II*, p. 880, p. 884, p. 935.
- 29) *The Short Novels of Thomas Wolfe*, p. 272.
- 30) *Ibid.*, p. 275.
- 31) Thomas Wolfe, *You Can't Go Home Again* (Perennial Classics, 1998), pp. 656-657.
- 32) *Ibid.*, p. 661.
- 33) 1934年発行の「2ライヒスマルク銀貨」には、既に隅の方に小さくハーケンクロイツが刻まれている。1936発行の「2ライヒスマルク銀貨」では、より中央部分に近い所に大きくハーケンクロイツが刻まれている。
- 34) Colnect (<http://colnect.com/ja>) に紹介されている「2ライヒスマルク」(1936年発行) の写真映像を図2に使用した。
- 35) Terence Dewsnap, *Thomas Wolfe's You Can't Go Home Again and The Web and the Rock* (Monarch Press, 1965), pp. 45-46.
- 36) Elizabeth Nowell, *Thomas Wolfe : A Biography* (Doubleday and Company, 1960), p. 337.
- 37) David Herbert Donald, *Look Homeward*, p. 390.